

外来化学療法を受けている大腸がん患者が体験している 皮膚障害に対するストレスと対処行動に関する研究

三浦 一二美¹⁾, 石田 和子²⁾

1)新潟厚生連長岡中央総合病院, 2)新潟県立看護大学

キーワード：外来化学療法 有害事象 皮膚障害 ストレス 対処行動

研究目的

本研究では、治療を開始し継続する過程の中で、分子標的治療をうけている大腸がん患者が化学療法治療に起因する有害事象を体験している 皮膚障害に対するストレスから対処行動のプロセスを明らかにする。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、因子探索の研究デザインを用いた。

2. 研究対象者

外来化学療法を受けている大腸がん患者で、皮膚障害の有害事象が高頻度にみられる抗がん剤治療を1クール以上施行しており同意が得られた5名。

3. データ収集方法

データ収集は、2011年6月1日から2012年2月29日の期間に、半構成的面接を研究対象者に対して1から3回を実施した。面接内容は、「患者の化学療法に関する思い、皮膚障害に関する状況をどのように抱えて、皮膚障害に対する対処をどのように判断し実施しているのか、さらにその際に、どのような支援を得ながら判断しているのか」であり、面接は研究参加者の自由な語りに沿うように行った。面接内容は、研究対象者の承諾を得て録音を行った。面接時間は、1回23分から47分であった。

4. データ分析方法

分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : 以下 M-GTA) の手順に従って行った (木下, 2010a, 2010b,)。

分析の信頼性・妥当性を確保するために、がん看護の質的研究の経験者より、1例目の概念生成の段階からスーパーバイズを受け、資料の照合を行い、研究の信頼性・妥当性を高め、化学療法を繰り返す患者の状況を縦断的に調査し、その変化を追跡し、研究の信頼性を高めた。

5. 倫理的配慮

本研究の実施に先立ち、調査施設 A 総合病院倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

結果

1. 対象者の概要

本研究ではA病院で外来化学療法を受ける大腸がん患者に研究依頼をし、同意を得られた対象者は5名で、その概要は表1に示す通りである。

対象者の年齢は49～78歳であり、平均年齢は65歳 (標準偏差±11.77) であった。性別は女性3名男性2名であった。皮膚障害は、爪囲炎、ざ瘡様皮疹、皮膚乾燥、掻痒症、皮膚疼痛、であった。

表1. 対象者の概要

対象者	性別	年齢	職業	疾患	皮膚障害
A	男性	60歳代	無職	S状結腸がん	爪囲炎 (Gr1→1) ざ瘡様皮疹(Gr1→1)
B	男性	40歳代	会社員	直腸がん	爪囲炎 (Gr1→1) ざ瘡様皮疹(Gr3→2) 皮膚乾燥 (Gr1→2) 掻痒症 (Gr1→1) 皮膚疼痛 (Gr1→1)
C	女性	70歳代	主婦	盲腸がん	爪囲炎 (Gr1→2) 皮膚乾燥 (Gr1→1) 掻痒症 (Gr1→1)
D	女性	60歳代	主婦	S状結腸がん	皮膚乾燥 (Gr1→1)
E	女性	70歳代	主婦	盲腸がん	皮膚乾燥 (Gr1→1)

2. 外来化学療法を受けている大腸がん患者が体験している皮膚障害に対するストレスと対処行動のプロセス

本文では、以下『』はコアカテゴリー、【】はカテゴリー、〈〉は概念を示す。

本研究の対象者の、外来化学療法を受けている患者が体験している皮膚障害に対するストレスと対処行動のプロセスは、2つのコアカテゴリー、5つのカテゴリー、17の概念から構成された。表2に一覧表を示す。_____で表示した概念はカテゴリーと同等の説明力を持つ概念である。

表2. 概念・カテゴリー・コアカテゴリー一覧表

コアカテゴリー	カテゴリー	概念
繰り返しながら 折り合いをつけ る体験	多彩な皮膚症状に対する認知	<u>副作用の皮膚症状に対する生きるためのあきらめ</u>
		否定的に表現される皮膚症状
		痛みを伴う皮膚症状
		変化する皮膚症状の自覚
	多彩な皮膚症状と治療継続の葛藤	しびれを伴う皮膚症状の存在
		脅威的な皮膚症状に戸惑う
		外観の変化に抱く不安
		皮膚ケアの効果が無いと感じる皮膚治療
	自己流の工夫に対する変化	効果が無い皮膚治療に嫌気がさす
		処方された薬に対する期待
拮がりをもった 体験	皮膚症状の変化と皮膚ケアへの関心の高まり	少しでも良くなりたいと自分流の工夫
		<u>克服できない皮膚症状の受け入れ</u>
	皮膚症状の軽快を目指した自分流の工夫	同病者と効果がある情報を交換
		周囲の人からの援助に感謝
		うまくいった対処を継続
		薬の使用方法を学ぶことを意識
	<u>日常生活の中に皮膚症状に対するセルフケア行動の取り込み</u>	

さらに、データから生成した概念やカテゴリーの関係は図に表し、相互の関係や変化のプロセスを示した結果図(図1)を作成した。

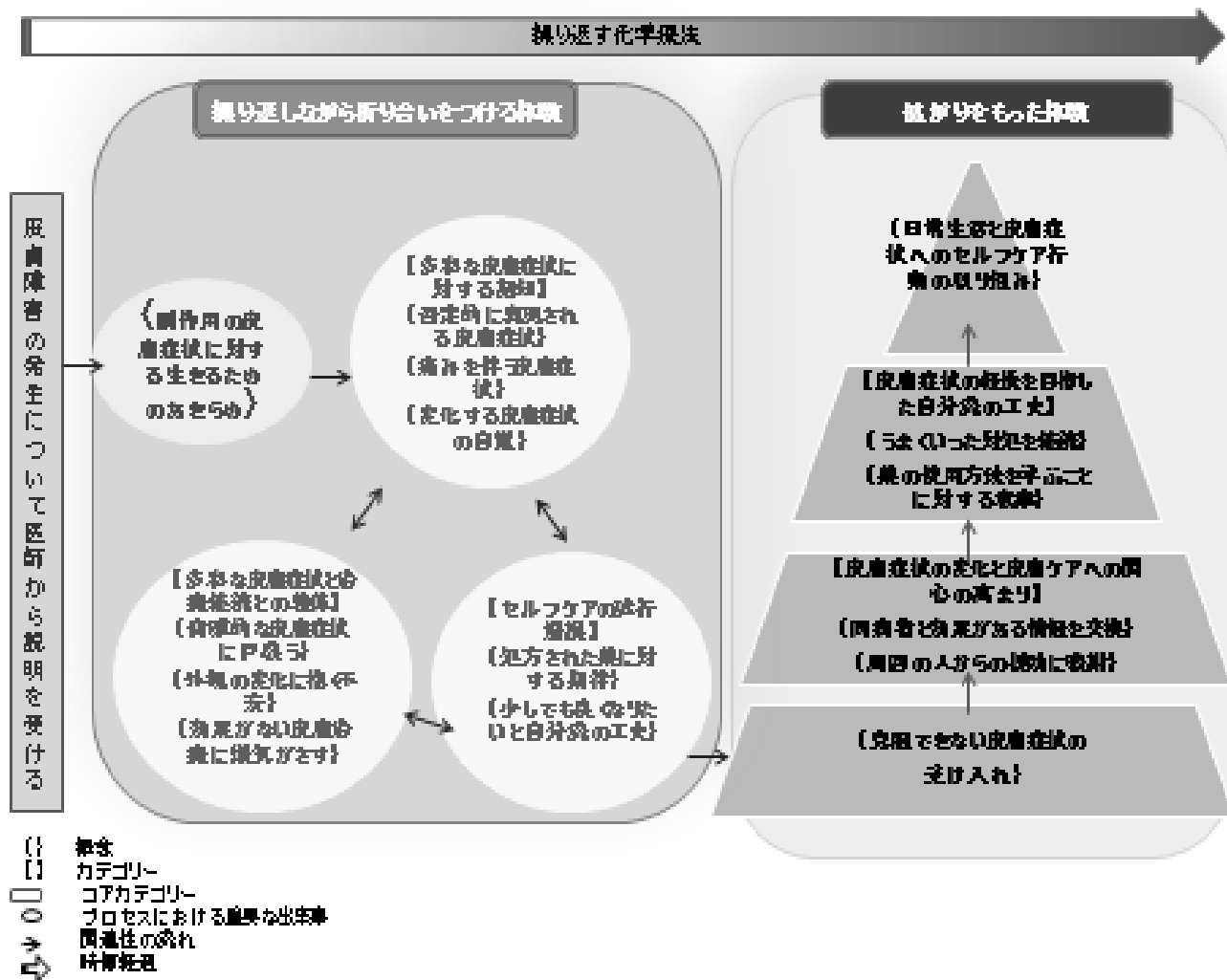


図1. 外来化学療法を受けている大腸がん患者が体験している皮膚障害に対するストレスと対処行動のプロセス

- 1) 外来化学療法を受けている大腸がん患者は体験している皮膚障害に対して、『繰り返しながら折り合いをつける体験』、『拡がりをもった体験』のストレスと対処行動のプロセスを踏みながら過ごしていた。
- 2) 『繰り返しながら折り合いをつける体験』は、抗がん剤の変更に伴う皮膚障害について医療者から説明を受け〈副作用の皮膚症状に対する生きるためのあきらめ〉から始まり、治療開始後に皮膚障害を受けることで【多彩な皮膚症状に対する認知】が出現し、【セルフケアの試行錯誤】を繰り返し、【多彩な皮膚症状と治療継続の葛藤】を抱えながら相互に影響しあっている体験であった。
- 3) 『拡がりをもった体験』は、〈克服できない皮膚症状の受け入れ〉を土台に、【皮膚症状の変化と皮膚ケアへの関心の高まり】から【皮膚症状の軽快を目指した自分流の工夫】を模索しながら【セルフケア行動の取り込み】まで、時間とともに育まれていく体験であった。

考察

本研究結果であるコアカテゴリに対する考察およびこの結果から示唆される看護実践のあり方を考察した。

1. 繰り返しながら折り合いをつける体験

患者の症状体験における認知的評価は、〈副作用の皮膚症状に対する生きるための

あきらめ) から始まっていた。それは、一次評価として、外来化学療法を受ける患者が抗がん剤の変更・中止を考える時というのは、それまでの治療の効果が認められなくなった場合が多く、すなわち病気の進行を意味するつらい状態にあり治療決定に伴う戸惑いと落胆が重なり、生きるためなら治療を継続していこうと苦渋な決断している時期だったからと考える。そんな治療変更選択時に皮膚障害の説明が医療者からあったことを語られることは少なかった。そして、そのまま治療が開始となり、二次的評価として、【多彩な皮膚症状に対する認知】が出現し【セルフケアの試行錯誤】しながら【多彩な皮膚症状と治療継続の葛藤】を抱えていた。さらに、このストレス状態による影響として、長期間化学療法を行いながら日常生活を過ごしていた長期的影響である身体的疾患と自信と意欲の変化が考えられ、繰り返し折り合いをつける体験に影響していたと考える。

2. 拡がりをもった体験

1. で述べたことを踏まえて、【セルフケア行動の取り込み】にむけて【克服できない皮膚症状の受け入れ】という現実を直視することから始まった。化学療法を受けながらがんとともに生きていく患者に対し、自分の気持ちを表出することは重要であることを伝え、看護師はいつでも患者の気持ちを聴く存在にあることを機会があるごとに伝えていく必要がある(遠藤, 2004)。対処は個人がストレスフルであると評価することであり、人間一環境の関係から起こる要求と、そこから生じる感情を、個人が処理していく過程のこと(リチャード・S・ラザルスら, 1984)であり、プロセスを重視して再評価をしていくことが大切であると考え。皮膚症状に対処していく経過において、自分がどんな気持ちであったかを誰かに話をしたり、自分がやるべきことや言うべきことをいろいろ考えてみることから患者自身がセルフモニタリングする機会となり、〈同病者と効果がある情報を交換〉や〈周囲の人からの援助に感謝〉し【皮膚症状の変化と皮膚ケアへの関心の高まり】となったと考える。さらに、〈薬の使用方法を学ぶことに対する意識〉や〈うまくいった対処を継続〉する【皮膚症状の軽快を目指した自分流の工夫】という段階になり対処ストラテジーを積み重ねていくことが重要と考える。

今後の課題

今回の研究期間において本研究は、研究対象者が治療変更・中断により計画予定の10名以上に満たらず理論的飽和化までに至らなかった。そのため分析対象者をさらに増やし理論的飽和化を今後目指していく必要がある。

引用文献

- 1) 遠藤久美(2004) ; Nursing Today (4), 22-23,
- 2) 木下康仁(2010a) ; グランデット・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い, 弘文堂, 東京
- 3) 木下康仁(2010b) ; ライブ講義M-GTA 実践的質的研究への誘い, 弘文堂, 東京
- 4) リチャード・S・ラザルス, スーザン・フォルクマン(1984) 著, 本明 寛ら監訳(2007) ; ストレスの心理学[認知的評価と対処の研究], 実務教育出版, 東京
- 5) 有害事象共通用語規準 v4.0 日本語訳 JCOG/JSCO 版, 2010